# 遊や

口上詞

是ハ平乃宗盛なり扨も遠江国
池田乃宿乃長者ゆやと申ハ
ひさしくとゝめをきてはへる
しかるに老母のいたはりとて
たひ〱暇をこひ候へども此ば
かりの花見乃ともとおもひ
とゝめをきて候いつ小旅りある

トモ
候ふみん　ワキ　撞や来まてあらん
浅ひへやしへ　養てハ　養孫写
わしき数あまやしくハ花を
見ふむ　是ハ遠江國池田宿
の長の内に侍り人へ申　朝顔と
女にて候　さてもゆや久敷都に
御入候ふが老母此程痛りとて

さひしく人を待の間をまへん
侍るまし大臣くハかとよ　此度ハ
程ゝ遣まて乃かまを作　此程の
旅衣の日もそひてくる
夕暮乃宿なきせ事にハふ
りまて枕ありても程もなく
都みりや　な都に着にけり

詞

あら嬉しや急候ほどに都に

候きそん号斯る候因か趣や葛

御へんとくれあ里きま作

出て案内を申さりや覚悟ひは

いかに案内申候池田殿よりの

楢の宗里ては あら嬉しく候申へ

御文は雨露のめぐみ尽し嵐なひ

それ無事乃父母よりの人召よ

在りて我やあら侍心もとなや

何とて池田の宿の長者

よめ楢か宗里ては なりよ楢と

申かあらめ付しやさそく

候にされ何覚候へある書

以前かり候へは此の様より後文の作

法然上人　シテ「あゝら珍しや生(?)ゝ
清盛ミを見えうけるゆくくはあゝ
咲也や此御文のやうもたのみ
しく敦盛みえてん　ワキ詞「さやうに
法のは　シテ詞「此上い様をも法まて
宗生ゞみ此文哉も法月みのけて
敦盛を也申さうれるまえあるべ
ゝ敦盛へ来るらん譲のうぢ作(?)
トモ「や様や乃法下いわすしては
シテ「かくいふ条みも今も侍申さん
「敦盛申はいかに中上人一ノ谷の
法然衆?くる　子詞「此方へ来れと
申へ「暑てはこなた為?宗里
らん　シテ詞「いかに中上はや母旅

いさなわいかなるくに法度を
あまか日本文武の道をそへは
ひむ雨ぎんとちうと見衆み
へは画ー羊詞なまた故にあまた花
如尺と作や見ほまれも雨ー
ろ我ゆきたりうにおろへ
三十上に ーニニーニー、、ニー、ニー
甘泉殿の春の夜の夢さまし候を
ーー、ーーーーーー、、ニ、ニ
なをさしーとあかつ驪山宮漾
下ニ、ニニーーーーーニ
秋乃夜乃月をりるきなかめしも
、ーーニーーーニ、ニニー、ー
あわれは末世一代教主如来も
ニノ、ニニーニーー、ー、ーー
生死の掟をまのまた大りけり
ニニーニーニニーニニ、ーー
ゑりしー二月はのしーしく
ニ、ーーニニーー、ー
伊とかの跡此教は鹿やわまきよ
ニーーニニニー、ーニーー
柿本様こそしりまき春花をうま

待もやさしき心よりも老が営

あふさとも漁よ芝さ婦りあと

なかば雅海へ出る鳥よやうよ

中志りし衰清醜を維りをいま

一度乃見しおり乃移さなむ

うふ歓子え一世のかなりなるに

おあし世よふまうひ路りしにハ

まみり蚊ありまさ折ふ色したく

兎くわ歓わうちまとひとえひ

見乃ほうさ三くうろへとよ

老ぬまさあさうぬふ禄君あかほ

い色ハいらよく見下くかしな

君かとぶはことまれも思出落　上音間

漁なりしの夢とし世　やまも浅

うき世中を過くも草原の葉末露
霜月ハ絶よひ乃なかなか思に
れ見然ふ老母のよめ露あわ
拙うろ葉末もさらぬ事乃秋哀
なくも風守世互と新同子帖
為とよ見しすうろ哀なれく
今ハかやうりうん書偶風を

然らハあはれはまおへし
ワキ詞
老母を痛はりるもさる事なれ共
ふ浅子母いよもあらし此歎
りなまみ萬見哀なけの候ら見捨
然ふへよ 侍言葉をさうへきなる
をる故吉遠代花を哀あるハとく
み帰るへうしはばいあうし風る

玉乃露涙なりけるなる袂をかなや

さぞたく涙離をたちりまさん

いやくきやうよ心よはきわ方に

任をそ見川ぬまじりゆも心哉

あをさめ琴花見車同車ゆきて

花よ心をなくさ下世と牛飼

車よせよとてこれも思ひ家

露乃うちなみ涙出としく花袂也

心見さき急よゆかぬり数足よハ

車よりなかぬ花見あかれわ

恋も我よ(な)水煮まにくとも

くれハ川の音羽の山さしくる

東路とてもひかりやさめく

そうる涙か流しや前よ

雨あらそひ雨乃ひゞき作るらし
木屋し秋坂よ霜雨子し人の落葉
ましし山かに山のつてし山越えん
路中ありみちの木間かゝしてみち
光八まりとあし山ぎは山白雪
しての雲来去す人たびし見ひとし
うれぬ見見雨世上秋有様なり

旅々いりし春濃色見長閑雨り
東山　四條五條の橋の上し
老若男女貴賤都鄙色めく花衣
袖をつらねて行すゑの雲かと
見えて八重ひとへさく九重の花
盛名にしおふ春乃氣色かな
河原おもてを過行ば急ぐ心の程

かともなく車大路や六波羅の
地蔵堂よと伏し拝む観音も
同座あり闡提救世の方便あら
たにたらちねを守り給へや
実や守りの末すぐに頼む命は
しらたまの愛宕の寺も打過ぬ
六道の辻とかや実に恐ろしや

此道は冥途に通ふなる物を心
細鳥辺山烟の末も薄霞む
聲も旅雁の横たはる北斗の
星の曇もなき御法の花も
開くなる経書堂は是かとよ
其たらちねを尋ぬなる子安の
塔を過行けば春の隙行駒の道

上ヲリ
いや庭もなく見苦しき車宿り
上地
馬とゞめ爰よりは花車おりゐの衣
播磨潟しかまのかちぢ
清水の佛乃御前に念誦して
母乃祈誓を申さん
ワキ詞
いかに
誰かある
トモ
御前に候
ワキ詞
ゆやは
いづくにあるぞ
いまだ御堂に
御座候
ワキ
急いで来れと申候へ
トモ
畏て候 いかに小様よ申候はゞとく
遊や見まく候はゞ若葉の
もとの御酒宴なりしまゐては
急いで御出あるべきとの御事
かくと申候よし御申へ
シテ詞
心得
申候はゞいかに中作りや花散るとも濃(?)

浅漬のりしほかてはに馴よ
とくくたえもう待寐の乃若菜にて
かゝわあ稜と養は事まゝえは
三下詞
なまをりや浅酒蒸のりしまかを
とはとやう
上詞
さを世作
三下
さくくえ
案しふひるゆきくはなかく皆く
をう浅可りかくへやあつ西白衣

筝やはいろ海をさしつまを見てて
はよなまとえ待当座馴となも
上ーーー
あえもき稜のハぬ世 まきまや
ーーーーーーーーーー
おりひうろよおまちくいろ袖かよ
ーーーーーーーーーー
あきりはよしやよしなよ世落
ーーーーーーーーーー
なうひ欲きえなみはまかあまを
ーーーーーーーーーー
廿七
花笑よ蝶舞孫くとは雲根上み

鶯と云ふ声は金もハ流水よ
志つさ待て参らする事とし
鐘ハ寒雲を隔て参らする
まゝ　清水寺の鐘の声祇園
精舎を離れし諸行無常のあり
やしまの地主権現乃尊像を遷し
ねれ煩悩の理なるを生老必滅の世の

なりひらはためし　あは遊佛も
本ハ捨し世の中をみすてへ
みえぬ都の清水山衣をそめこす
寺へのほる乃橋柱立出て嵐の
雲花やあるぬおほ欅の祇園林
下河原　南をりはかね眺れは
大仏殿護る蔵に熊野権現の衣

うき浪にも同しく立騒
稲荷山みち落葉の音かなし
森の秋又花乃露ハ清水落たく
たそかれためのもしき事なき手に濡
おきのさと山萩に濃き羽嵐の
菊の露ぬるゝ情ある人恋
三下詞
わかれを惜まつやの色し
ロ乎詞
ゆや一さし舞うて涙を
三下詞
人やまつらむかくて係よ村雨
しら花を埋む雁しはるかの水
ロ乎詞
ふかく村雨の後来る秋
ちらしそめや[illegible]
春雨や春雨の降ハかみさく
小倉の渡りの桜花咲をやしらぬ

ひと声ある よしあしの雁の
さとさ乃心とわあきこ秋は
いつはをを愛都の衣も情もせし
な秋しおほ下乃菊や古歌さら愛
きり花理なる哀なかりやく
雁とよびる北東にかゝるらん
阿侍らとまとめや 中ゝ乃事

とゞくかゝる所か色し あらう
宇都し やたうとやうち見歌音声
袖別生也見となかや嫉しや雁
是ぞ名か風う秋しや雁めぐて
夢よ侍をハもとしや侍衰
加りるへゝ悩よましに浪雁と
中々侍乃路か明東路さしてて

行先乃庵のくやすゝ梅与梅か香
ぞおもふとさしも心しられなり
旅乃やさみえさて茶を見れは哉
このゆめ旅のうらは越路なるらん
おほつかにも色々見残りの眺く